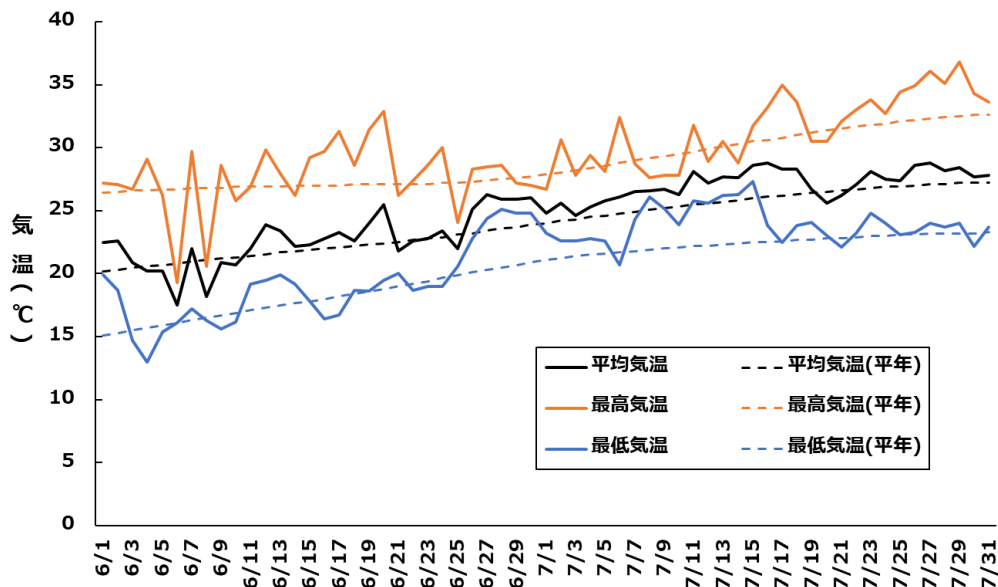


令和5年 お茶づくり技術情報 (No.9)

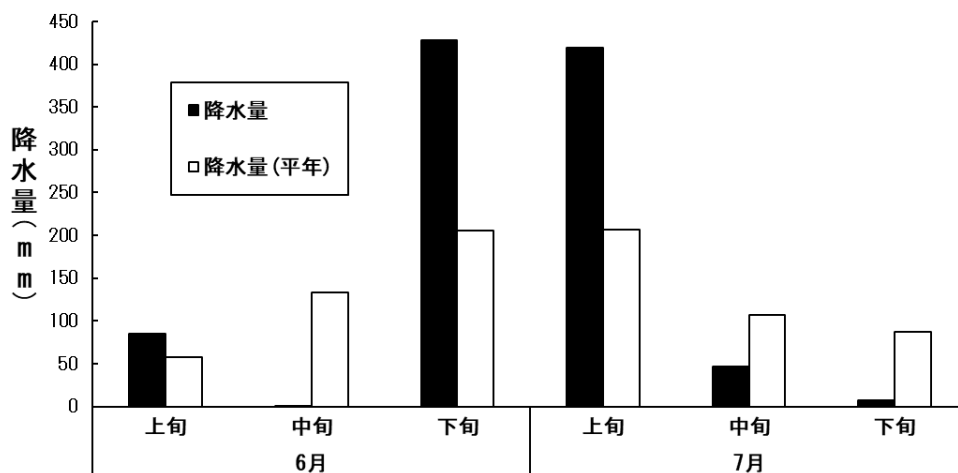
2023年8月2日
佐賀県茶業技術協会
佐賀県茶業試験場

1. 気象

1) 気象の経過



(1) 6、7月の平均気温は、6月上旬 20.6℃(平年差 -0.2℃)、6月中旬 23.2℃(+1.2℃)、6月下旬 24.2℃(+1.1℃)、7月上旬 25.8℃(+1.1℃)、7月中旬 27.7℃(+1.7℃)、7月下旬 27.8℃(+0.8℃)で経過し、6月中旬から7月下旬は平年より高く推移した。



(2) 6、7月の降水量は、6月上旬 85.0 mm(平年比 147%)、6月中旬 0.5 mm(0.4%)、6月下旬 428.0 mm(208%)、7月上旬 419.0 mm(203%)、7月中旬 46.5 mm(44%)、7月下旬 7.5 mm(9%)、期間積算降水量 986.5 mm(124%)であり、6月下旬から7月上旬は平年より降水量が非常に多かった。

2) 今後の気象の見通し

■ 1か月予報（気象庁、2023年7月27日発表）

1か月予報（2023年07月27日発表）の解説 福岡管区気象台

向こう1か月の天候の見通し
九州北部地方（山口県含む）（07/29～08/28）

1か月の平均気温・降水量・日照時間

	平均気温（1か月）	降水量（1か月）	日照時間（1か月）
九州北部地方（山口県含む）	低10 並20 高70% 高い見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並の見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並の見込み

（1）向こう1か月の平均気温は高く、降水量および日照時間は、ほぼ平年並となる見込みである。

2. 今後の管理

1) 土壌・肥料

■ 土壌 EC 値の動き

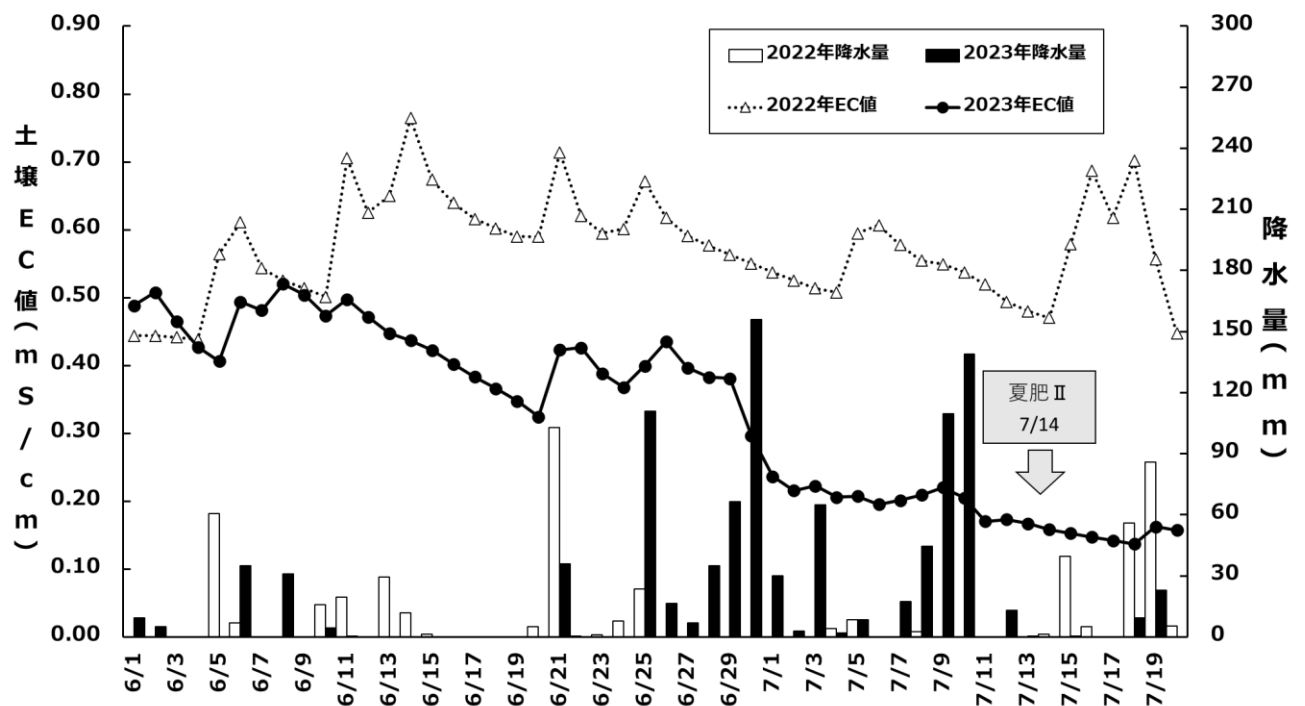


図 茶試作況調査園における土壌 EC 値の推移

注1) 本年の土壌 EC 値は、雨落ち部の深さ25cm部分に埋設した土壌センサーにて測定し、実測値に基づき推定した値を示す

（1）6、7月の土壌 EC 値は、6月下旬から7月上旬に多量の降雨があったことにより、徐々に低下している。

■苦土石灰の施用

茶樹の生育に適した土壌 pH は 4.0～5.0 であるが、県内茶園の中には pH4.0 を下回る茶園が多く見られる。そのため、苦土石灰等の土壌改良材の投入による酸度矯正が必要である。また、苦土石灰は苦土の補給も兼ねることができ有効である。

(1) 施用時期

7月下旬～8月中旬（秋肥施用2週間程前）

(2) 投入量

目安として 100kg/10a（苦土石灰の場合）

土壌や用いる土壌改良資材の種類によって投入量が異なるため、土壌診断結果に基づき決定する。

(3) 注意点

石灰資材とアンモニア態窒素を含む窒素肥料を十分な間隔を空けずに施用すると、アンモニアがガス化、揮散することがある。窒素成分が無駄になるだけでなく根を痛めることがあるため、窒素肥料の施用は2週間程度間隔をあける。

2) 深耕

管理作業時の踏圧によって土壌がしまり、通気性や排水性が悪化する。土壌硬度計の数値が 22 を超えてくると根の伸長が著しく悪くなるため、深耕による土壌環境の改善が重要である。

特に来年度中切り更新を計画している園や幼木園を中心に行うことで、その効果がより高くなる。また、深耕前に堆肥等の有機物を施用することで土壌物理性の改善が期待される。

ただし、深耕は断根を伴い、樹勢低下が著しい場合や降水量が少ない時に行うと樹勢低下を招くため、今後の気象状況を注視し、深耕実施の有無を慎重に判断する。

(1) 実施時期

8月中旬～9月上旬（山間部は早め（～8月下旬）に行う）

(2) 注意点

時期が遅れると発根を抑制するため、新根の発生が始まる前に行う。

3) 干ばつ対策

夏季は来年一番茶の母枝となる芽の生育期であり、この時期に干ばつの影響を受けると、翌年一番茶の減収につながるため、対策が必要である。

幼木園では土壌表面からの蒸発が大きいいため、特に干ばつに注意する。

(1) 敷きわら、敷き草

幼木園では敷きわらや敷き草で蒸発および地温上昇防止に努める。

(2) かん水

水利の良い圃場では、10a あたり 10t を目安にかん水を行う。

水量が限られる場合は、夕方に葉水の散布を行う。

【かん水のタイミングの目安】

- ・ 5mm 以上の雨が降らない期間が 10～15 日続いた場合

(3) 整枝

干ばつ時に整枝を行うと茶樹への負担が大きいため、整枝は控える。

(4) 施肥・深耕

干ばつ時は根が弱っており、肥料も溶けにくいいため、施肥は降雨前に実施する。

深耕は乾燥の助長や断根等マイナス面が大きいため降雨後に行う。

4) 台風対策

台風が襲来した場合、大雨による水害、強風による茶樹の物理的損傷や潮風害を受ける可能性があるため注意が必要である。強風によって葉傷が生じた場合、傷口から赤焼病等の病原菌が侵入するため、これまで発生歴のある園では特に注意を要する。

(1) 事前対策

- ・ 大雨による土壌流亡を防ぐため、園内外を巡回し集排水溝を点検、整備する。
- ・ 防風ネットを設置する。
- ・ 潮風害対応のため、事前に散水用の真水を確保しておく。

(2) 事後対策

- ・ 強風で葉傷が生じた園では、できるだけ早く銅水和剤の散布を行う。また赤焼病等の発生歴のある園ではカスミンボルドーの散布を行う。
- ・ 幼木園では、マルチのはがれや株の浮き上がりを点検し、元の状態に戻す。
株が動いた場合は、早めに土寄せを行い、敷きわら等で地際部や根を保護する。
- ・ 先枯れ、枝枯れ等、被害が大きい場合は樹の回復後に被害部の直下でせん除する。
- ・ 被害園では樹勢の回復を最優先とし、整枝や施肥は控える。
- ・ 潮風害の発生が懸念される茶園、特に海岸線に近い茶園では台風通過後速やかに真水を散水し、付着した塩分を洗い流す。
- ・ 強風害・潮風害に伴い、落葉等の被害園では、樹勢回復のために窒素肥料の葉面散布が効果的である(ただし、最終摘採園のみ)。